



社会教育課程 この一年

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-07-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 油川, 英明 メールアドレス: 所属:
URL	https://hokkyodai.repo.nii.ac.jp/records/9226

社会教育課程 この一年

今年度の社会教育課程は、文化人類学の百瀬 響先生の赴任に始まりました。若さと行動力、そして旺盛な研究活動は、学生のみならず同僚全体に「百瀬効果」を発揮しています。特に、博物館に関わる科目の充実には精力的に取り組まれており、学芸員養成に「燃えて」います。

今年も例年のように、4月には初々しい新入生を迎えました。その数33名で、年々、目的意識のはっきりした入学生が増えてきているように感じられ、受け入れ側としての質・量の充実が一層求められてきているように思われます。

恒例の新入生合宿研修は、7月3、4日と大滝セミナーハウスで行われました。北湯沢リハビリセンターの見学では、センターの概要や現在の福祉に関わる問題について職員の方からお話を伺うことができました。学生からも活発な質問が出され、今年の新入生の特徴がさっそくあらわれたようで、たのしく感じられました。さらに、センターでは温泉を利用したリハビリの実際など、大きな施設の全容を丁寧に案内してもらいました。夕食後は、これも恒例になりました（しようとしています）が、社会教育課程担当のスタッフによる講演が行われました。それぞれの専門分野の研究内容や過年度の卒業論文等から、新入生が興味を示すと思われることが紹介されました。学生のみならず、スタッフもお互いの分野の交流ができて、何か得をしたように思われる時間でした。

8月に入り、教育実習が始まりました。今年は、3年生が8月19日～9月11日までの間の1週間、4年生は8月19日から9月16日までの間の2週間で、それぞれ24名と22名の実習生が市内の中学校にお世話になりました。実習委員会の尽力により、実習の事前、事後の指導をこれまでよりも念入りに行なうことができましたが、来年への「宿題」も少し残りました。このような中で、各方面からの指導にもより、今年はこれまでよりも多い5名の教員採用が内定しました。

また、今年から社会教育課程の障害児教育実習を、美唄養護学校で始めました。福祉関係を希望する学生も年々増えているようです。

教育実習と並行して、博物館実習もこの時期に行われました。7月25日～10月5日までの間の1週間で、遠くは標茶町郷土館や別海町郷土資料館、あるいは網走の北方民族博物館まで及び、担当の百瀬先生は八面六臂の活躍でした。実習としては何とか大学の周辺で、というのが課題ですが、目下検討中です。

これらの実習は、学生が初めて公的に社会と接触するわけで、マナーや社会常識など、相手方からはそれ相当のものが要求され、戸惑いながらも自分に欠けているものを見つけてきています。

社会教育課程の講義や演習、あるいは学生の自主的な活動から生まれた今年度の「出版物」を紹介しますと、「社会教育計画・社会教育調査法 報告集」（山本先生）、「社会教育課題研究：高齢者の歩行速度と生活ペースに関する意識－札幌市、岩見沢市の比較から－」（安井先生）、「平成6年度博物館実習パンフレット」（百瀬先生）、「社会教育課題研究：危機管理を考える」（今年度末発行予定、油川）、「空知郷土研究会研究レポート集第7号」（坂本君他）などとなっています。このような積み重ねが社会教育課程の土台のひとつになってくれることを願っています。

最近の「新課程」等の改組・設立としては、岐阜大学の「地域科学部」、福島大学の「生涯教育課程」、本学旭川校の「生涯教育課程」、札幌校の「国際理解教育課程」などがあげられます。新課程の設立当初に見られた「総合科学」の名称のものは余り見当たりません。これも「自然の流れ」と「時の流れ」の作用によるものかと思われます。現代の大学はととも忙しくなく、初めての卒業生を出さず出さないうちに、もう改組とか将来計画に追われています。この時点で、あえて将来的なことを考えるとき、そのベースには先の「自然の流れ」（学問としての発展方向）を見据え、「時の流れ」（文教政策、社会変化）を評価する感覚が必要かと思います。自然の流れに逆らい、単に時の流れに乗るだけでは、将来溺れてしまう不安があります。本学の社会教育課程がそうならないように用心しながら、将来の計画を模索しています。（油川 英明）